

論文要旨 八戸南部氏の研究―南北朝期を中心に

総合文化学専攻 地域文化リノベーション・シヨンプログラム

G0218008

馬超波

鎌倉期の南部氏の始まりから、南北朝期八戸南部氏の文献検討を通じて、南部氏一族について考察を行った。

第一章では、糠部南部氏の由来について紹介した。また鎌倉期の南部氏について、個々の史料を検討し、鎌倉時代の南部氏一族が御家人として活動していたことを確認した。また「南部氏文書」の性格について、根城南部氏の家伝文書で、現在には奥州北部の中世の歴史を具体的に示して史料的な価値が高いとされていることを紹介した。

第二章では、第一節として、代表的な先行研究である佐藤進一氏の『南北朝の動乱』、またこの時期の陸奥におけるいわゆる奥州小幕府を紹介する遠藤巖氏の「建武政権下の陸奥国府に関する一考察」、「南北朝内乱の中で」の内容を、本稿の問題関心にかかわる範囲で紹介した。第二節では、南部師行の糠部郡奉行としての諸側面について、糠部郡奉行とはいっても南部師行の管轄地域は糠部にとどまらなかったことが確認される。比内・鹿角・久慈・閉伊の諸郡及び遠野保での任務が命じられていることがわかる。また、この時期の伊達氏は、義良親王を奉じて奥州鎮定のために下向した北畠頭家に属し、式評定衆となった。北条氏残党の乱では、連動して蜂起した北条方の与党を討った。

伊達氏一族この時期の拠点は、陸奥国伊達郡（現在の福島県伊達市地域）である。もともと糠部郡の領主とは思われない。したがってこの打渡は、単純な新恩の給付の結果といえる。鎌倉幕府滅亡の時点で、横溝一族が分裂した。北条氏残党に味方をしてしたのは、横溝浄円、孫二郎入道と横溝六郎三郎入道である。新政府に協力したのは、横溝孫六重頼と横溝彦三郎祐貞である。鎌倉幕府滅亡の時点で、工藤一族も分裂した。北条氏残党に見方をしていたのは八戸工藤左衛門次郎と工藤右近将監である。新政府に協力したのは、工藤景資である。糠部郡

内の闕所地は、郡外の武士伊達氏一族、郡奉行の中条時長及び郡内の武士横溝氏、工藤氏一族にあげられたことがわかる。このことは国府の糠部郡内勢力の牽制の政策の一つとみられる。

第三節では、北畠顕家の第1回と第2回遠征のことを確認できた。

北畠顕家と南部師行の死後、後継者の北畠顕信と南部長は国府奪回作戦を確立した。結局、顕信が優勢のこともあったが、最後は諸方からの援軍を得た義房が翌康永元年（興国三年）十月末に南朝方の津久裳橋城を落として勝利した。暦応二年（延元四年）三月十七日から貞和二年（正平元年）十二月九日まで、北朝の足利方から南部長への降伏の誘いがあった。その降伏勧告を受け入れる時間は貞和二年十二月九日から二十一日までと推定できる。政長は足利方に降伏した後も北畠顕信と連絡を取りあった。この時、彼の立場は安定しなかったこととみられる。政長の降伏の真偽については疑わしい。正平五年（観応元年）八月没する間際、八戸を孫の信光に、七戸郷を先だつて死去した嫡男信政の後家に割譲している。ただし、南部長は成人の後、七戸の半分を与えられる約束があることを確認できた。

以上を通じて、糠部南部氏の由来と南北朝時代における糠部郡奉行の南部氏の活動を確認できた。八戸南部氏は陸奥国府の現地奉行として、治安維持、所領打渡、合戦従軍などの義務があることがわかった。論文の中で引用した史料は『八戸市史史料編』所載のものに限定され、しかも南部家文書を中心に検討した。ただし、当該期の奥羽北部全体を理解するためには、これでは不十分であり、様々な合戦記、地方史等の分析が必要である。これらについては、今後の課題としたい。